

## 第2章 生涯学習の新段階

### —21世紀の社会像と京都の課題を踏まえて—

21世紀は、不透明感の強い予測困難な時代ともいわれているが、生活ビッグバンとでもいいう社会生活の根幹にかかわる大きな価値観の転換が確実に生じるであろう。

ハッピーマンデー<sup>\*18</sup>の登場や平成14年度からの完全学校週5日制への移行、さらには、戦後ベビーブーム世代の定年の訪れなどから自由時間革命といったものも当然想定されるところである。

また、今日の高度情報化の飛躍的な進展はパソコンの普及率からも察することができる。特にインターネットとのかかわりでは、「京都アイネット」<sup>\*19</sup>の加入者数が平成7年5月に千人程度だったものが、本年5月には3万人に達している。[図6]

しかも、情報は瞬時に世界を駆け巡り、国際化社会の到来という側面を一層加速させている。

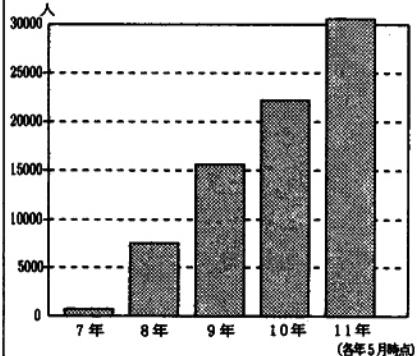
さらに、少子・高齢化が急激に進み、平成27(2015)年には、国民の4人に一人が65歳以上の高齢者という本格的な長寿社会を迎えると予測されている。現在でも、京都市の総人口の16.2%が65歳以上(平成10年10月推計人口)となっており、異なる二世代が高齢者層を形成しているという状況がある。一方、少子化に関しては、わが国の合計特殊出生率<sup>\*20</sup>は平成9年に1.39となり、京都市においては、これをさらに下回る1.23という状況にある。

なお、大学審議会の推計によると、平成4年度205万人であった18歳人口も、平成21(2009)年度には120万人となり、大学志願者数も120万人から70万人に減少す

\*18) 平成10年秋の臨時国会で成立した「改正祝日法(ハッピーマンデー法)」。年間14日ある国民の祝日の一部を月曜日に移動して、土・日と合わせた3連休を増やすとするもの。

\*19) 京都のインターネットプロバイダー(接続業者)。京都市などが出資する㈱京都高度技術研究所等により平成7年4月に開設された。

図6 京都アイネット加入者数



\*20) 15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計した値で、その年の年齢別出生率が今後とも変わらないと仮定した場合に、一人の女性が一生の間に生む平均の子どもの数。

との見方もなされており、学問の都・京都にも少なからぬ影響を及ぼすこととなろう。

すべてが右肩上がりの時代は去り、戦後築かれた様々な神話も崩れつつある。その上、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄の社会システムは、地球温暖化やオゾン層の破壊など地球規模での環境問題や資源の枯渇化を引き起こし、人類の生存基盤さえ脅かしている。加えて、薬物乱用や青少年犯罪の深刻化は、21世紀の繁栄を危うくしている。

こうした国内外の抱える今日的課題の解決に向けて、生涯学習の果たしうる役割を、京都の都市特性とのかかわりの中でもう一度見つめ直すことは極めて重要であり、現在指摘されている家庭の教育力の低下、地域コミュニティの弱体化、社会正義の喪失、人権尊重の国際的な潮流を踏まえた人権教育の推進などへ積極的に対応することが必要である。

## 1 生涯学習の目標

～人を育てる、文化を創る、時代を拓く

京都には、1200年有余という長い歴史と伝統がある。そこから生み出された文化土壤があり、価値観が転換する中、もう一度、京都の培った不易なる部分を問い合わせ直す時代が確実に来るであろう。この時、伝統文化や伝統産業の継承、宗教的行事の意義や京都を舞台に石門心学<sup>\*21</sup>が展開した心の修養なども見直される必要がある。

また、京都は、グローバルかつローカルな都市でもある。

平安京の造営には、貪欲なまでの渡来文化の摂取が

\*21) 江戸中期の思想家である石田梅岩(1685～1744年)によって広められた。梅岩は、平易な言葉と分かりやすい喻え話で正直と僕約を説き、町人学問を創りあげた。

あり、室町時代、一時途絶えていた祇園祭を復興させた町衆は、海外から輸入した豪華な胴掛けなどで山や鉢を飾った。さらに、明治維新後の東京遷都に伴う京都衰亡の危機においても、いち早く外国の産業技術を取り入れ、京都復興にかけた情熱があった。その精神は、今もベンチャースピリットとして受け継がれ、京都が発信する先端産業を支えている。

一方、大都市でありながら、京都には地域共同体意識が紛れもなく息づいている。室町時代以降続く自治意識を基盤として、明治2年には、日本で初めての学区制番組小学校<sup>\*22</sup>を住民自らが設立し、また、江戸時代からの地蔵盆には、地域全体で子どもたちの成長を見守ろうとする風習を見て取ることができる。

こうした都市特性は、時代の流れとともに薄れつつあることも事実であるが、地域社会に今も確かに息づいている。その精神あるいは伝統は、人づくり、まちづくりの貴重な資源となるものである。

京都市の生涯学習は、この人的、物的資源を基盤として、「人を育てる」「文化を創る」「時代を拓く」という重要な役割を都市の歴史の中で果たしうるのではないかと期待するところである。

「人を育てる」とは、人と人とを結び付け、困難に厳然と立ち向かい、新たな発展を模索する新しい時代の新しい京町衆の育成を支援することである。

「文化を創る」とは、生活、芸術、人権等、今日の様々な文化を結び付け、そこから新しい文化を創造し、世界文化自由都市<sup>\*23</sup>・京都の実現に寄与することである。

そして、「時代を拓く」とは、過去と現在を結び付け、幾多の衰亡の危機から京都を蘇らせた先人たちの

\*22) 明治2年、京都府からの下付金と市民の寄付金等により、1番組1校、全市で64校が創設された。番組小学校は教育にとどまらず、戸籍事務、衛生事務、防火警察事務等番組の会所の機能を有しており、まさにミニ総合庁舎として機能していた。

\*23) 昭和53年10月、京都市は、世界文化自由都市を宣言。現在、京都市の都市理念となっている。宣言文には、「全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、ここに自由につどい、自由な文化交流を行う」とある。

進取に学び、豊かな未来を形成することである。

京都の生涯学習は、こうした壮大な役割を担いうるものであるとの理想を掲げ、施策の展開に努めてほしい。

## 2 生涯学習の重点

### ～「共生の時代」を念頭に

生涯学習という言葉が一般化したのは、昭和56年の中央教育審議会答申「生涯教育について」が述べた「自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的有意思に基づいて行うことを基本とするものであり … (略) … これを生涯学習とよぶにふさわしい」との表現からである。

教育の供給者ではなく、学習者に視点を置くという考え方には他ならない。しかし、個人の自発性や自主性を強調するだけでは、お互いに支え合って生きていくという共生の時代には十分に対応できないであろう。責任感や連帯感、モラルが喪失されたり、次世代を育てる心を失う危機を招いてはならないのであって、生涯学習の根底に他者とのかかわりを重視するという考え方が必要とされる。

それは、異文化を理解する「内なる国際化」や男女共同参画社会の実現とも深くかかわるものである。

そのため、今後10年を見据えた京都市の施策展開については、個人の自由意思を基盤としつつも、個人的な知識の習得や自己の充足のためだけにではなく、より他者とのかかわり、地域社会とのかかわりを広げる「関係」の方向に生涯学習を求め、その実現に向

て、あらゆる教育・文化・学習資源を結び付ける努力  
を行政に期待したい。